茶事雜考

別12
19

国立国会図書館　タイトル『茶事雜考』 請求記号 本別12-19

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19
ガラス使用

茶事雜考 全

長澤伴雄文若

別12
19

佐佐木茂生雄
所藏

国立国会図書館　タイトル『茶事雜考』　請求記号 本別12-19

ガラス使用

自序

帝国図書館蔵

柏庵

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19

ガラス使用

出申しし他事のうつりたしうていまこと者を
きうきて有りを去年より郡内橋ちて
あるなり喫茶を流るも立まし至いふる
郡の物語の場より物の老のかうかく物
出しをあるへのきてそいやめて面きるれ
きてきみりきうしね市蔵ふ面ちてよれ
物喰てんのきよりうしいしと落ちいるく
そのうきうを稲舟のいるもとうあらね
かそのれ印ちのうう書書きれ第山ふ
物きあうを其をきうよそ物をんも安るは

うきうれを宜ちれ物かく引ちれ
てり取絵をその書書をてれうるも
かうもれうんを以ちあちれ
うしれうもうのれ去うれ物うり立
角ふ書ふ物れきさうふりたんて角ふ
ふてきてその書書ちて用ふ立
し此物ふて用ふ立沒りを出うこい書母
或を堀ちへを蔵書家ふかりて書の蔵り
枝物をしふしへしれらきううりさうり
行きしめてううかうみれあゆう物うれれを

記し侍りしに下臈ふかうやつの作手なり
まゐりかゝりて千利休より法成とかゝ
寫まゐりてそれよりうたをよみて書ふ
書たるしまこと家この流儀ふるさへ出来
かゝるおのゝ名かくくふんきうあるね
をいまゝもかれいに出たれんこそ茶とかふ
物の宣國ゝ用ひ如し昔の和歌長ゝ
の世ゝ歌ふ言をくゝとこの三ムナつゝ意のうら表
ゝかりかゝる侍るおもをいまし葉ホトロカん
為かりゝゝその他ホカまゐるふかゝらしあるる

子孫紀をしを一二所ヒトツ筆ふをまゐ筆
のをさひてもその子ふをまゐていまんをゝ
ゝらんをもゝ著述をるかゝるをもれ
き二ゝ三ゝの書ふかゝるをきを
まゐてかゝる藤孝のかゝふかゝるおのゝ
きゝゝらをれをひゝるゝもおゝりかんを
出をゝしゝゝ自をゝてその書ゝらきゝ見む人その
ひゝゝ子孫ゝゝかゝむゝをゝみふ出ツナをゝし
孝のゝまゝし紀をゝとし筆め聞ゝて
かゝゝゝの拾ゝてひゝゝ無ナらんをゝふ著フラハ

て醫を見やうて世中の人の眼をあきらかふ
しるの理(コトハリ)をて茶の道乃ならく和ろそ
ゆくをしるの為ゆあら茶

長澤伴雄

茶事雜考上卷

茶事の始

茶事の始の　皇國(ミクニ)に茶を始めしは弘仁六年四
月　嵯峨天皇近江國滋賀(シガ)韓崎(カラサキ)に行幸(ミユキ)あらせしと
き、崇福寺大僧都永忠護命らに仕うる茶を煎(ハシ)て
奉りしに、類聚國史卷一の巻に見えたるを權輿
とし、また茶に関する法式を南浦紹明夢窓國師
に傳(ツタヘ)しより世に弘まりぬ茶の書多きなれ
ども名のみ多く、中にも古今和歌集をこの比いさ
ゝか得たるものとなれば記して見んと

[illegible]其[illegible]ばか凌雲集[illegible]古の書を中野[illegible]より移[illegible]
乃作者を集め 寛元年より 弘仁五年まで
多く詩集[illegible]秋日皇太[illegible]茅池亭御製[illegible]云 圃秋云
蕭池亭望爽天遠聲驚旅雁寒引聽林燈 岸柳惟
初□潭荷葉欲穿蕭然幽興處院裏滿茶煙 云云
[illegible]夏日左大將軍藤原冬嗣閑居院御製[illegible]避暑
時来閑院裏池亭一把釣魚竿 迴塘柳翠夕陽晴 曲
岸松聲炎節寒 吟詩不厭鳩香茗 乘興偏宜聽雅
弾 斬時清泉滴煩慮況乎寂寞日成歡 [illegible]同日陪
[illegible]應製 信野貞主 詩[illegible]寂然閑院當馳道 祇候仙
輿漾一路 酌茗藥室徑行入 横琴玩席倚石岩 松蔭

絶冷牛時後 花氣猶薫風 [illegible] 水上青蘋莫 [illegible] 限
君王少選愛遊魚 文花秀麗 上巳 閑院 [illegible] 夏日左太將軍藤原朝臣
浣手水竹每成 閑 遠春薔薇珊瑚色 迎夏 叢茗玳瑁班 景
追風長松下 提琴 携茗 [illegible] 光 焙 閑 知貪 鶯 駕 忘 聞 処 日 落 西 山
石解還 [illegible] 淳和 光皇
乃 御 製 [illegible] 時 御 [illegible]
性靈集巻四 弘仁五年閏七月八日 獻梵字 [illegible] 雜
文表 上 窟觀 餘暇時 [illegible] 印度之文 茶湯 坐下
閲 振且之書 [illegible]
空海 [illegible] 八の年 賀の詩
茶の [illegible]
[illegible] 弘仁四年
[illegible] 永忠僧 [illegible]
[illegible] 世 [illegible] 事 [illegible] 此物
皇國 元来 在来 [illegible] 漢國 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

事し物らその善別定なりぬ宗傳教大師唐
より茶實を持帰りて日吉山に植をめその後
栂尾宇治に出ぬも栂尾ぬ日吉社神道秘
密記に云ふ所の書也神宜大藏卿行光が
撰述にして後世の書に云へる寂滝和尚茶實を
持て帰朝せしに行ふ他書に漏れ洩れ
たる云ふ所説信ぜざる所也その法門を
中古近江國淺賀の里人にて其の父百枝と云ふ人
比枝の神の託宣によりて山の麓に草庵を結び
居て神護景雲元年に最澄を従へ唐より

帰朝の後も父の言ふ所の日枝の榊神宮院に
居し事此度見て驚ある傳
此度の永忠に載せし淺賀唐崎
にて摘出しけりと也
其後おのれ出て
皇國に茶を広
最澄法師

茶事雜考

近曆二十四年四月遣唐使に入る傳教大師帰朝の時に
異朝の一行もまた奇物少しして坊中に住せ公人豊前守藤文唐の時に
傳園に植しめ是を元幼の一行を元幼の茶
その茶盛に盛りて異人に与へ茶樹屋敷
其豊前の後裔多家に伝りて此茶実家紋
変ん此りに伝へ何に伝りて伝へ明徳
し傳し日吉社秘密記に云ふ所の事

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19

ガラス使用

植ゑ物のその善別定なりぬれば傳教大師唐
より茶實を持帰りて日吉山に植ゑ、その後
栂尾宇治に移せるも栂尾はしめは日吉社神道秘
密記に茶の事なり、この書は、神宜大藏卿行丸が
撰述にして後世の書なり、へは、最澄和尚茶實を
持て帰朝せしなり、他書に慶を得されは
ことなり、此説信ぜられてその法脈を
中世近江國淺賀の里人にてその父百枝なる人
比枝の神の託ふまりて、その山の麓に草庵を結び
居て、神護景雲元年に最澄を誘ひ、さて唐より

帰朝の後も、父の言ふまゝに日枝の麓神宮院に
居し事は、世に知られたる事なり、ある僧
明ふ、今の永忠が祖父なりしも淺賀唐崎より
出て橋出しはらんと出もふ、ふりくく出て
ものゆれば、出ずくに和密記の說
ものゆれて最澄法師
皇國に茶まきたる
〻〻と出たきはかりかて最澄を延暦十三
年遣唐使に法師として入唐し、同廿四年に帰朝し
て弘仁十三年六月五十六（六の字日本紀略にて四とあり）にて死せり
まこと上に引る梵釈寺永忠は元亨釋書

（元亨釈書は印本にて三年を二十三年とあるなどは誤りなるべし　年暦は二十四年の帰朝にて考へ合はすべし）

ふ郷ニて、宝亀の初入唐して延暦の末に
帰朝し、弘仁七年四月七十四箇年にて滅し給ひぬ
て、最澄より十二箇年先日本に帰朝の年なりふ
延暦の末にて、弘仁六年永忠茶事をしより
た十年ばかり前の事なり、さらば永忠は
ちかう夢にてこの法をとりふ相生しけらし、茶
祖述茶理論書に茶は神代より有事なりと云又
七十二木の中の陽木なりと則茶なりと云ふ
安閑天皇乃市茶きこしめしし器の云々陶器なり
或は傳茶器の時秀衡ふ千歳茶紀ふ云事を
引きて、用明　崇峻の市世なる説あり茶陽なりふ
を宜ふんなりとかよりさし沼きて天智持統のより聖武の内代
なり、なら用ひ給ふなりあり、なほ儀ありて記
ふき謬りなりとて千歳茶紀ふ書しまた七十二木云乃

天智　持統　聖武
以上六代なるべし

茶道秘要抄茶製造
鵜の部ふ日向国の深山
ふ自然生の茶あり初
ちたるなりそのまふ捨ておきあり
其茶樹をひてふ及
てやうやう茶ひなりて是より諸民
ちをりて日向国を茶州
と称せしまさしき物
類聚国史

乃ち紀きる立部神書ふ云ふ後世の偽書なりとを論じた
して真ふ云ふ事なり説ひ根源二月雲仙嶽記
ふ二月八日大盤岩祭を百姓ふて修行事として
修ふ茶なりなり出りそなる天平元年二月八日ふ
皇国の初ありとかなる
宝亀の年ふてこの比天平元年ふ
もなりなりてこの比天平元年ふ
修ふ行茶なりなる雲仙嶽をそなる
前後混乱しきこと中なし雲仙嶽のその比
延暦武ふ桓武天皇紀ふ
昔ふ杉山禁ふ伊豆の山中ふ自然生の茶
なりてなりなる山中ふ自然生
なりなりなる神代より茶事
最澄宝亀永忠事
類聚国史ふ弘仁六年夏四月癸亥幸近江国滋賀韓崎
使過崇福寺大僧都永忠護命法師等宰衆僧奉
迎於門外、皇帝降輿昇堂礼佛更過梵釋寺傳興

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

賦詩皇太子并及群臣奉和者衆大僧都永忠和尚
煎茶奉御施御被昇御船泛湖國司奏風俗歌舞
五位以上每揉以下賜衣被吏生以下郡司以上賜綿
有差云云こゝに明る護命法師を性靈集巻十に
天長六年に宮廷の茶湯の会を設て元興大僧正
の八十賀を為る元興大僧正の事ふて其のこゝ
永忠者とこゝに茶を奉るのこし僧也是に次て同
年の六月壬寅令畿内並近江丹波播磨等國殖茶毎
年獻之とあるこゝの四月に天皇こゝに茶を
さこしめされしるし世に稱し奉
敬意ふう形れ奉

まこしに如こゝにきこしめしたんの勅
明ん云めまこゝ漢國より特れ来りて初めて栽こゝ
もちらぬ比ふしあれを世こゝふに世こゝうり多くに
物きりしらぬこゝして其程ども定かし
こよりこゝあはせて件の國こゝに殖こゝしめ
ひしに明こゝれ世こゝ強て偖師の料に
ちらん茶の切紙の第一に睡こゝきこし湯を止こ
こゝ事を蒙こゝ和れ侍して修後の布施
明こゝふこゝ奉こゝ物形多こゝ和れして
これ世に弥こゝんの市下こゝ為こゝふてかこゝに物し

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

たまひし所なり、次くに出きる茶湯、挽茶は
乃条所なる古書ども、皆をらく味はひさ、
侍し、　天皇の御所ふめされしいにしへ、まれ
ゆりうり、かくてこの頃はあらく、さうふ所りも
てわし、勅撰、經國集、淡雪集、性靈集、菅家文草、
本朝文粹、を家の詩集ふをろく、見えまこれ
為ふ茶具、調度も出来ぬるゆへ、延喜の民部
式、集人式、雜式、ふ見えあてあきらかなり、
きれども僧徒乃勅行の藥ふ用ふる、和意為ま
だ、なくて世中ふ知し、あひて、ひのくに貴賤

老ゆ、ひとふ、ふ、めて、知ふ、ふ、のこ、をあらくし
くぶ、おのつくら世ふもあ、ふ、ふ、を作りもいて、
まこと抹茶、煎茶、點茶の製も、ひのくと精密を
ひのひ、あらひ、ふ、古の海ふて、在經し所り、
さるを、業安五年七月、鳥羽上皇六十賀の内儀
ふ、萬事を康和乃例ふ准をらるべきトの由、
ふて、煎茶具を多明の宝庫ふ尋さを多まし
しかこと、弥先ぬる由ふて、仁和寺の圓堂ふ藏
らるし、をを出ぬ、たまし、しる由海ふ見えを、
この一事ふてもさだ、ひ、仏ふ母ふ、祝をたまをさ

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

とし多ハ知らるゝ事なり　後鳥羽院の建
久二年ニ建仁寺の榮西法師宋より帰朝のとき
筑前の背輝山ニ所ニ誌ニ殖をのしるゝ
岩上茶ニ名ニ物みて多れ共中無乃茶の淳り
事し如り也多かゝて梅尾寺乃明恵上人
多おらるゝ事を明慧さらニ梅尾ニ殖生しる
り明慧傳記下の巻ニ建仁寺長老より茶を送ら
さられたるを送ニ分ニ是を同多ニ茶遺困消食
氣快ゝらしむる徳有り御ゝ奉朝ニ普ゝ
さる由申けるハ其實を尋て西三年殖初らも

けり誠ニ眠をさまし氣を晴らし徳ある人ハ衆
僧ニ茶を服をしめらるゝ或人語傳て云建仁寺
僧正御房大唐國より持帰りたまひし多茶子
を被進けるを殖さるゝ云云傳記を明慧
御の出けるを云云の茶子喜海法
この事の年紀を詳ニ考ると明慧ニ世を
すりのち宋西ニ名ゆまりさるゝ事なを
文治建久より建保まての間の事なるべし
さて榮西帰朝の後二十四年を経て建保二年
乃春陽舎て將軍家御脳て加持ものとて
さるらるし時茶一服を書一巻さへて奉るし

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

門蘭叔

[illegible]

東鑑巻廿二建保二年二月廿四日乃條ニ見エ
タリ同し文ニ上所載茶徳之書也とあるはこの僧
の著述の喫茶養生記ノ略ノ略ノ抄乃
事ニもしるしたりて衛生ノ世ニ行はれたりとゆくなど
梅尾ニ茶を栽ヘ作製り出しする何ならの書ど
もみえて牧峯ニもみられたれまた龍嶺集
ニ清拙和尚無夢國師梅尾ニ遊ばれし時の詩ニ畿重
峰傳又迴渓行到茶山睡眼開云云の茶山とは
梅尾をさして仮字ノ抄ノ茶山ノ茶ノ字ノ茶ノ字ノ茶山ノ
抄字ノ茶ノ字ノ名ノ書き故ノ抄ノ酒茶論ニ

本非宋人之宋の祭君謨ノ茶ノ式ノ皇国ノ茶ノ式ノ出ノ事ノ仁嘉録ノ茶ノ抄ノ茶ノ抄ノ茶ノ抄ノ茶ノ抄ノ

春雨物ニ梅尾山の春の茶ノ事ノ

引ノ西齋詩話ニ壽上人略自日東以其國所産
梅尾山茶見惠賦詩謝其略云茶得梅山信初嘗日
本茶云云とあるこの詩
を宋人乃作抄りかくしらふ生らかく愛好抄
を有しかりまて梅尾抄を本の茶ノ抄れそのの
他抄を非の茶ノ抄ノ抄ノ抄

御堂ふ悔ふ事ありしとて慶園禅師乃作ると
異剣庭訓往来ふ上畧可有園茶ふ會由某候云云我朝
名山者以梅尾為第一也仁和寺醍醐宇治葉室
醍醐寺神尾寺是為御花以外大和室生伊賀八多
伊勢河居駿河清見寺藏河越茶皆是天下所指
言也仁和寺及大和伊賀之名所ハ比所々園ハ如以瑪瑙
比尾礫又以梅尾比仁和寺醍醐以黄金對鉛鉄
以茶碗之名誉殊振者ふ云云明慧ふ梅
尾ふ茶殖をめしよりふ虎関ふこの書かきし時ふて
去元百年ばかりの年間ばかりそのうちふかく國々

十三

ふ行和ありておのづからよろこき事も出来ふあれ
ば梅尾のふふ立ふ梅尾のあらさるしをれ
ばしふ宇治乃冥ふ美製の抽出事て除ふ
梅尾ふ立ふ立ふ立ふ一条禅閤の
尺素往来ふ上宇治者當代近来之市賞既梅尾者
此間海裏微之体候名下不雲云云不可被思食
忘乎先被召換使於二方背然不晩之尤右可被
定市出之茶後欲云云まこと上ふ引多ふ沙門蘭
叔ふ酒茶論ふ上茶園ふ梅山信初賞日本茶本幻梅
尾山為第一宇治次之梅岳梅相似故通而用近代

九

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

如菴有此宇治名茶第一梅尾山沢之出茶名
を思ひ合せて知るべし かくて後ハ宇治の里
乃ふかたにも拙ありきれたるやうに和雲永のむし
より此処を元の下地茶所定きをられ その家
をさへ定めたるまひて 内裏御料に献らるるなり
御警の市料なる二所を拙撰をるれてさて事り
をるるを市使りしてあるをるを その返状
乃いろりしきるを世へ出ること出ること
明りを命をるを上ずるまるの件をるをく
記をるるをくく最隆宣旨永忠復命まこと常西

明慧紹明夢窓疎石をうをるより新和
しをてその拙をしを茶竹を所謂正温令人睡
下氣消衰明目云ふ事なるを意を（をるて学令人
薬 この茶陽の産ふ小用に拙撰をるをかく
世をにをるを知て今ハ六十余の国をを拙ハ先
対馬をを嶋の嶋々産の浦々茶をり木をを
山の奥谷の産ふをへ橋出しいをるれの山麓の
ををををしハ晩ハかをををよいるをるまて
見を茶をを家をかくをるをををををり
をてををハ 大皇国のいをを産をををを法

しかるに、後世、茶を飲むことを初めたるなり、

茶を植しる事

茶園を開かれしハ最澄を始として、考ふるに、先日本エ乃遣唐使の渡唐より持来し種ハ殖えそめ、ひん、彩窟國史の巻世三の巻に、弘仁六年六月壬寅令畿内並近江丹波播摩等國殖茶毎年勧之とあり、是元年、そこの四月滋賀に、永忠護命等に勧し、茶を愛ものあり、殖ふるさとなりこの國なり、今て殖えそめ、最澄永忠等ハ私に殖ものし、茶の種を持て来り、今し殖んとすべし、さてその殖えをめぐる茶を

内裡より使を遣して製法乃事ども
問の事を経しかの西宮物乃年中恒例三月の
條に義遣造茶使事とあるこれなり同書録
時立内裏所々條ふ茶園在主殿寮東とあるこれ多
内裡ふも殖らしてとある
拾芥抄ふも然て天内裡ふ茶園
在宮城長隅占地方世五丈とあり」まこと本朝文
粹十二の巻ふ慶滋保胤ら詩ふ晩秋過参州薬王寺
有感参河州碧海郡有一道場曰薬王寺有茶園有
薬園下畧白眉嶺角金是四鶴菊之卒牛馬之走物の茶園ふ
宮ふて殖

世を同うせし人なり、此頃を彼の弘仁の会の
畿内近江丹波播磨乃外にも、初て造り始め
しなり、まこと百寮制賀なるべし（典薬寮ハ）
乃薬をはらふ法なりこの寮なれ薬園あり茶
園あり狗犯園あり中古にて上の引用書ど
も中傳の遺へるまでの比もやく主殿寮なる
をうたがひて典薬寮なれしるべ
なりしかるに権記長徳元年十月十日出納為親
造茶所請省今年料造進御茶料物文云
かくのごとく上古よりも有事しるべ葉上修正ありて

帰りしたるきて品ようるしかしかるに
てきたりして物尾宇治のみにも強つきしら
おのつから其地にもたれて強ふ今のごとく
世中ふうきとみもてうて次くよの件ふれ
ゐるうるとみれん茶貢祖述ふ天智
茶園を設ふのつりして当初御代雲上ふて常の舞居
ふ茶を嘗一ちまつりふ初て内裏て
事常ひるんしたるを仁王今の裏作りのきた
まつりて公ふふ卿ふもたまし
きうをひをしを仏宇ふを殺ちれを信れがくし
まこと古の茶園を園池司ひかを預りうんかをかるん
うくるの司を改ふ寛平八年ふ内膳司ふ伝られ
年れを所寮記作ふ比を世ふ内膳司ふ伝られ
世ふ茶ふ記作ふ比を世ふ内膳司ふ伝られ

茶事雜考下卷

茶湯茶會茶式茶禮等の事

茶湯を、サトウと訓ずるは、中世より茶會或は茶式茶禮の中唱しを利休より以前茶乃湯と唱ふ

たるなるべく意あるべし、其を次々ふ以ての如し茶道辨偽酷泉窟觀瀾著中に書ふ茶湯を家禮とせ

ん茶會を語り呼て茶湯と以ふ或は禪林ふ莫茶莫湯ハ家を切りて茶湯と以ふ以り西説

ヨリ所會より故ふ茶會と唱ふ事しと云へ

茶旨祖述ふ明友親戚を睦(むつ)しその交接傲惰

以らざるを茶乃湯とし大禮を對ずる小禮と表

国立国会図書館　タイトル『茶事雜考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

法会などの物のあらはれ中ゑふ先たちたく茶の湯と
号する事慣はり、古実の茶寄を用ゐるもし類
ふ方ちらたゞなふ法茶禮茶式をもふべし
云はゞ人ゝ家の程あるふ似あれと古
茶湯と云事頃のさ法中ゑ中ゑ茶禮茶会はゞ
唱し此のさ法ゑその類甚く多ゑ事ゑ
引多ゑ書の条々ふてあきらかゝ知ゑ多ゑ
つゞかし始ゑを干利休より以来を上古の茶
湯の趣をゑ考しまゑ中古の茶会茶式のさ
をも交へ採り用ひて今の如く物ふはゑれ又

一種乃風儀ゑ以ゑ多れはおのつゑら茶の湯
はゑふ一種の唱も出まへきはりかゝて指ふ
り會を会ふて人の集会ふを以ゑ言はゑ
て茶会ふ方ゑ方ゑ多ゑ中ゑ人の
茶會ゑ同し類ふきゑて浅ふ以ゑ深く
方もありぬへゑれ者あらゑあて茶湯の会はゑ
唱ふ人し者ゑ古乃高を先ゑ人の高を
ふゑ多ゑ多ゑ者ゑ者ゑ人あらし
物ゑ以ゑ乃世ふ佛高ふ奥ゑを茶湯ゑ古
儀の物ゑ多ゑ以ゑ

影供の茶乃湯をみて詩を作れり

因ふ云太平記廿七の巻田楽の事を仏事の条下田楽見物の小屋桟敷の搏倒しに足利の軍を射かけ敵を滅ぼす事ありしを黙茶の為に一服を呑ませ給ふ事ありて茶湯の事まさしく見え侍る也

さてさらの事乃古く見え侍る也

文雄の真偽を書けり遍照發揮性霊集の中に弘法大師の詩文を始め侍る

同書巻三中壽感興詩序に此士流是日強占羅門是歳勇進俗家賀之酒會方袍何事也是開目端座思念佛徒逕具長諷鐘磬間響緊羅投袖投猿嚬足曲根為褥松栢簪膳茶湯一椀逍遥也

足

云云

中壽の年四十賀を行ふ時の事書に伝きて空海自らの五八の年賀を祝ひ弘仁四年まで同書巻四弘仁五年閏七月八日獻梵字并雜文表に云

窟観餘暇時學印度之文茶湯坐来作閑振且之書云云

巻十天長六年賀元興大僧正大徳八十詩序に此是故取卿飲上歯之禮仰大士借尊之儀聊與二三子設茶湯之供會期醍醐之淳集以表之云云

弘仁四年五年の頃陸奥の事一行を見て帰り侍乃

十二年まで元千三十年に奥州に帰り給ふ

遂に菊南紹明に入宋して

禅経山寺の廬堂に安傳へ帰朝して

皇國ニ弘ム初シテ俗説繁雑ニ以テ之ヲ仏ニ
ヨセ　さて俗永忠ヲ弘仁六年崩賀乃梵釋
寺ニテ　嵯峨天皇ニ獻ジ　すり陸ハヤ皇國
ニ茶ノ有ル事ヲ聞テ初テ　ひらかてひらかて榮
西明慧ヨリ明テ茶ヲ　ひろめ　ひろめ　世ニ
入ル　後見の説ニ　さて　その後の茶湯の含
ヲ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　或も法も定まりしニ
ちあらん　閑自端座思念佛德云云　曲根為褥松
柏鋪膳茶湯一椀云云　ある　しるを　設茶湯之法會
期醍醐淳集　以ヒ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　文を　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ

俗初の說ニテ萬ヲ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ
あるべし　文花秀麗ニシテ菩提公奉獻詩の中ニ羽客親講席山精供茶杯云云　題光上人山院詩
ニ　歸坊　梵宇深峯裡高僧住不還經行金策振安坐草衣閑寒竹
留殘春青蔬採田山相談酌綠茗煙火暮雲間　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　意
ちん　ひろめ　次ニ真俗交談記ニ延喜二年　醍醐天皇
仁和寺朝覲行幸御時　法皇御對面後茶二盞
有御勸　和琴一張為御引出物令進之給云云　仁和寺
御室御所の事　朝覲行幸　天皇御出ち
ヲ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　仙洞へ　天皇御出ち
法皇ニ　宇多天皇の御子　その時仁和寺ニ御坐ス
日本紀略ニ　昌泰二年十月上皇御落飾東寺ニテ御
受戒　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　同三年正月朝覲行幸の事　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　延
喜二年　初覲行幸の事　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　史の脫漏ニ　ひろめ　ひろめ
傳の異説ニ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　ひろめ　考ふべし　この時の御事を花鳥餘情若葉ニ

宇多御門御出家の後、正月三日朝覲行幸の為延
喜の帝仁和寺へ行幸ありし時も、御弟靴を徹を
ら見て又ま三拜し給ひ、主上ふも法皇も
同し御茶を供せし事もあり、御法体の時の儀
かくの如し、在俗の禮ふかき事乃ち如此
云云、次ふ新儀式上奉賀上皇御算事、云云
上皇供御膳基盤二御次供御酒、延喜十六年法皇供御茶也、又次
召加親王大臣参上候、賛子敷、延喜十六年供御膳次召
王令候賜膳賜茶次大臣并僧正聖宝流世親
召上皇之親王等、宇多天皇の御代同し時の事也、
茶の供御之時のし事を上ふ御つ事乃ち永忠の獻り

し給を書ふ見ものあらんあり、時ふ高倉院の御宝記ふ云、宝蔵の
まゝ供御ふ奉ふ事さへ云云、
ものあり、しもあらさりけれ、法式規則ふかゝ
して召さし給へ云云、
給ひし、云ふ云ふも上ふ引うる室梅ふ元興寺を
賛し給ふ、ふ伝ふ中ふ云ふ一時の御好奇
ものや、そしてこれ世窟ふ孝ふ、
かくて茶の事ハ上ものハ云ふ如く、弘仁の頃より
云云初て延喜式、西宝物、北山抄、ふ何ふ云ふ
所し動ふ行ふ、此讀經の僧徒ふ勝れし事

乃ち少て宴会儀式の事ハ宦官(オヤウクワン)に従(モツオホ)きて
しかやうさ〳〵なるもの也(ナリ)仏し海人藻
芥抄の中に茶事自上古我邦にありし挽茶(ヒキチヤ)の節會
なて於内裏公事儀式を設行(モウケ)し為
挽茶節会を以ふ也(ナリ)ける中や成(ナル)て他業に移
なるもの也(ナリ)さるなり。梅(オモヒ)ふ雲の門跡の修業ふ
物ふ引茶の事を引茶(ヒキチヤ)の会(エ)と云(イフ)
なし。南都ふ茶事ハ日本紀ふ引茶節会也
ふ事なれハ南都ふ茶を上古より伝りしなる
ものなり。茶ハ祖師ふ茶を元亨より始ふ

ものを佛ふも供しまつる
ものなる道ものなるふ
ものなる七十一祖禅人書
哥今ふ華厳宗の詩
ものなる書をつけてゐるべし

ふ中ふ以前ふ記録ふ
二百五十年ふ当りて高倉院の安元二年二月
後白川法皇五十の賀
内裏より奉らせ給ひ
しふ伝茶ふ
ふれはなる後世の茶ふ
異なる所設ふ
初し祖師ふ茶ふ
ふ中ふ
性霊集ふ
ゆるを、喫茶養生記ふ、榮西在唐之日、見貴重於

茶如眠睡忠臣施高傍古今義同ニシテ必ス新
知ルトモ飲食の強物明らかなるとき
風流ニシテ茶ヲ好ミ山林の士の飲食ニシテ有しを
一旦貧窮ニ陥りて後ハ俗家の大食ニ堪ヘ
しかハ栄西ヲ茶ヲ好ミ事ありと云
説に曰の自他ともに遠ざかるとの説ハ茶事談ニ陳光ニ傳ヲ授ル
紫野大徳寺ニ珠庵ニ住シ陳光書ヲ学禅僧ニ成リ京
眠睡ニ成る事甚し陳光常ニ
敬命ニ成て漂泊の身となり釈門ニ入ル
茶ニ悩ミ事ありと思
夢ニ成て我為めに授けた医の云く人生を粮
し命を保つ為ニ賢ニ眠を
を喫し心臓を粮ニ成し心を五蔵の君ニ成り茶ハ苦味

乃上首ニして苦味を
心臓強くして無病ニ成
して味ハ云陳光ニ成り
しかも栄西明慧西人の
古来の意を
茶ハ
或ハ東草集等の趣を
ら
茶ハ
如念之至恐眠ニ
乃上首ニして苦味の上首ニ成り茶を喫を
眠を
云陳光ニ成り
云
茶ハ
ニ
茶ハ
ニ
茶ハ
ニ

事柳彼會所為体内客殿懸隙簾前大庭敷
玉砂軒端幕窓金帷好上衆東會衆既集之後
初水纖酒三献次素麺茶一遍然後以山海改物
勸飯以林園美菓甘哺其後起座退席點茶有
奇殿時機鋪於二階排眺宝於四方是則喫茶之序
對月之御也尤曷恭之彩色歡迦靈山說化之粧
巍々右牧溪之墨絵觀音普陀示現之姿蕩々
善哭文除為眼画寒山拾得為面鬱卓懸金襴
置胡銅之花瓶机鋪金鋪立鍮石之香匙次著客
位之胡床陳彩皮之位之竹脚臨金銚香臺等

衝朱衝紅之香炉茶壺各物尾立旗之茶餞西
廂之茶置一對之餘棚而殘種々改菓北壁下建
一雙之屏風而掛色々之懸物中立鏡子陳場廻並
餞物而覆中合集列堅之後亭主之喜男獻茶
菓梅桃之若冠通建盞尤提場瓶右曳茶筅從
上位至末座執茶次第石鼎乱茶隆世重請数
数返之禮酒隆用順懸来及一滴之飲或四経十
膳之勝負或都都差恩之批判非啻催茶座之
興將又生茶之活計何事如之日景衝傾茶礼
乃陪則退茶具調美肴勧盃酒飛盃或謡或舞傍

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

一堂之奥又張又餞堂四方之隠堂上挑灯之燭簾前飛紫幕之薫餘懸宴名申畫委角
俱期面謁候皆抱類首抹鐘七日掃部助氏清
龍上洛ヒ御改宗之茶の法の茶
のさ法をおもしたるもの心し今世ふ夜今茶
引茶、茶き、中点、ひ少ふ少ふ
然物をしてふひるべし、氏往来の文中ふて
茶会さるく ひり、太平記十九巻光厳院殿室町ふ
田舎の者ども、茶の會酒宴の和ふて中あ茶の会と
酒宴とを比ふ少ふ比ふ茶ふ
中、同し意
ち、ひ見ひ、そうて十服茶、百服茶、ひ中ふ
ーきはり〳〵の純子金襴をうちきて四主ひの座ふ列をひして
千仏の光をなべて座ーひ〳〵ーて〳〵ふ中茶のみ
さ茶ふてきて、侍奉をして

同世三の巻 鞍馬寺縁起 弟地蔵 紀ふ上都ふ佐ふ木佐渡判官入道乃警を始めて在京の大名衆を語んて茶の會をもしひ日ふ宮ふ活計を尽ふ異国本朝の宝宝をつくり百座の座ーきはり〳〵の純子金襴をうちきて四主ひの座ふ列をひして千仏の光をなべて座ーひ〳〵ーて〳〵ふ中茶のみ

同世五の巻 新待年序 ふ上ふの比畠山入道乃警ふ石所ふ河川社樹守出岐大膳大夫乃ふ佐ふ木佐渡判官入道ひ以下日ふ寄合て酒宴茶會ひんをして酒宴茶會ひんをして

もてなを為り、攻の年ふ
ひんをしふさふふ寂寞閑雅を主
ふをし隨逸の根つを
歌の拍子をひをしふ流ふ
日の閑をふの陳ふ
ふ武士者の命ふ
ゆくもおのつうの
ふもあらしは
ふをふをもふ
ふ、茶式の始を筑前國崇福寺開山南浦紹明正
元年中入宋し、径山寺ふ虚堂ふ嗣法し、文永四年

ふ帰朝して、その法嗣を一かさり鈴山寺に住
せし宗福寺の什物をこれ茶式の妙所なるや、
その後書るを紫野の大徳寺へ移し、また天竜
寺の南山夢窓（夢窓国師）、茶陽を妙喜寺に定むゆふ（下略）
他書みて詳ハ是なれども、そのうみより口碑ふ
傳ヘてけみ然ありしを世世に伝ふ法きて、その
傳を考へるに、紹明を嘉祐元年の誕生ふて
正元元年ふ入宋し、文永四年ふ帰朝して延慶
元年ふ遷化し、夢窓をその傳ふ拠る

建治元年の生まれ紀應二年九月七十七歳ふて遷化
世寿を以て、紹明ふ遷化を延慶元年ハ夢窓
ふ齢三十四歳ふ当り、ふ法脈を其子の傳を受
得し、ふ当り、夢窓ふ宿徳のきこえ高き
ふ、その知れるふ如くふて、内ぞりの
高僧のその世ふ名の栄聞をなりそのまこと
数ふ知れぬ事の似たりしを、ねもまて
乃風を引えて、わき室ふ客人の数
ふも多うらんと知て、以ふ中を定めやうて僧
徒の拝ふふ似たりしは、振舞をあらん、

が、それまでの茶會を裏表にしていたものを、
かすかに和中をまぜて、つねしたその風を押
う茶りの形をしみて、うるはしんやうて往昔宮
永寿年の頃にしし意ふもうをひてうるをに
然ものをき程の形、茶道の一流華、後古もも
以ひんくの形んかをてうの大徳の遷化をある歓
應二年まて凡四十年の間いかもあくるの風を
世の行されけりし東州集六の巻正年三年正
月十八日蓮華王院月並和歌序の巻に観阿の遊
展宴酌之席、酒飲禅止茶禮重催勝於之端

何事不足以之以為既為之北朝の
貞和四年の事みて中院通冬卿記に頃日之茶会
主開雅弾賞之至可感と云々とれ多るその
世の事みて、夢窓の遷化をし観応二年より八
四年前の事の形、うるに等の歌を備をあて
俗説聲弁の夢窓の云々とある説を宣なしは
川、けと夢窓の書儀に後をし鼓をとうり
驚しわく形、かくて夢窓の後古の茶陽の
古の意を受嗣しを誰るあらん詳形を
うるとより遠の年頃て、芸思院将軍義政公を

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

始めての性ふて花瓶をも風流をも始め世
の中に移し事何ゝに付ても茶さゝやかし中
なるも、ときて茶事を好ミ分ひろ、その頃菊部
明の称名寺の時光公に法門の茶子を好ミ
てその業まもゝしきに有ゝを京に招て
大徳寺の真隆庵公に仕ふ坊ゝ居らしめ茶の
事何ゝに付て問明らめて、同明能阿弥中に者
ゝもその業夢ゝを受つゝも専ら如し
時ゝ世ゝより世ゝ世ゝ伝ゝ
明らかしゝこの時光法門ゝ傳ふ茶書ふをう

ゝ乃ゝ乃ゝ付ゝ法世の書ゝ命ゝ書ゝ命ゝ
康富記宮亂帰記二水記ゝ概ゝふ文亀二
年七月八十歳ゝて乃ゝ乃ゝ中ゝ中ゝ中ゝ応永
三十一年乃生ゝて義政公の茶ゝふ勅ゝ
ゝ比ゝゝゝ乃ゝゝふて茶長ゝ信一休或ハ
宗祇雪舟ゝ中ゝこれ同世の人ゝて茶ゝ風流
接戦の分乃ゝ主ゝ者を法ゝ中ゝ二水記
ゝ大永六年七月廿二日の条ゝ午時参青蓮院
万里小路阿野少将高倉少弼言業同道於池中
嶋有市茶、種々之儀也方興者数寄宗隆祇

廿五

候下京地下入道数寄上手也、ゆえ有こと、是ハ
陽光院様ゟ二十年ゟ法乃事ハ、
殿下加くのゝ如き数寄のて今ハ茶会の事
さ〻〻あるゆゑ、ちゝ〻ん如ゆゑし、
ちゝ〻〻上件の事実ゆゑ、太平記、園太暦、
喫茶養生記、喫茶往来、康富記、公忠公記、二水記、
言国卿記、元長卿記、おのゝ〻ゆゑ
へゝゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

乃武士の振舞ふを似氣なくいやしきと
はさしとなすなれども俗説弊ふ黙夢窓禁
むかしかくのごとく僧家より始め茶式を定
類をつけ唐鐘陸木を用ひ大小の劔を帯きれ僧
寺の行義なり異ふよりて大小の劔を接客し事もありよりら
まこと盗賊等りて大小の劔を帯きれ僧
ぬる多くなれども一向なる説のやうなれ
ばいとなかりすし
なれども茶湯黙意の子を表
して糧をいふなる深意もありなんとさへ推
なるべくなれども其の意を利休ならでは
なめ尋常の茶家者係のなりなるべきの
まもなりしかとして是をもての茶子

ゑ領らぬ事なりなれども
ふもなりぬべしかるに利休ならでは
それなりして世を茶家
てその道その法その式ハ
陸ふ今乃世のなきき風
なるなり茶をぬるて喫茶の
まこと茶書なるも中
うなりぬ見ふ
運ひ多前なるなふなる
なるくしなる物をしなんなはり

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』　請求記号 本別12-19
ガラス使用

陳昌其の茶書ふ
飲茶貴得茶中之
趣若不得其趣而
信口哺啜之嚼蠟
何異雖然趣固不
易知趣亦不易

うちとしき事ありて茶のうへにかくいたんと
おもひけれども上件はいとあはれ陸羽上件はいん
ようとうきとうにのこれるものの書籍をもふ微塵
て迷しみて心にいてはおのるさるしらるるあれ
ども、この書名人、この意をよく意得たる
さて最初ふ引て字佐の詩より設茶場之法
會期醍醐之醍集ものあるをいやくしてあ
年言ものありりるさるその年言を利休より
ものの方乃知音人にもちるやあらんや
因ふ云古四鐵都ものの大坂の冬陣ふあり

仁多侍竹束の以て幕をきが寅並てあり
りるをあて尚ものれ書の竹の中ふて茶記
ふ作るんきよの紀竹ありまん出をやて
密ー雜兵の出ふ弁をやはしてその
竹束の日ものふ切て巻へき竹撰求て
居るかいつてより放ちんを鐵の玉
充まて足をふ
ー帰日ものを或書ものをとりまるある
細河忠興ー茶を巻んものあるをし
給をしかしを忠興答て茶を敬

を待て夢の物語あらんされども夢うつ
ゝ覚しし俗語を聞
なるべし夢ひとりやすらしらそのお
人影赤めて止やまふあるもありこ
二四の物語を聞いまて時はもるもも
明りよりて時ひて言はへきるすれん

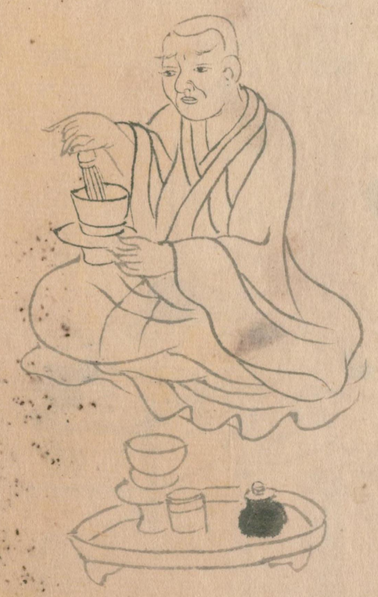
一ふく一銭

古紫乃
市茶
もしへ

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19
ガラス使用

花うん宗

御影堂の
古茶の
御り
ゆ



この二四の圖を七十一番藏人畫哥合の中
廿四番六十九番の出家の画に似り一ふく
一錢堂主人夢の中に佛を無ひるも皆
偽物なれども其中に古代の物
も乃もなしうらをおもひ合せ
この画のうしはとを番ひの歌のうしろ
玉乃屋ふかみんし

別12
19

三五止

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『茶事雑考』 請求記号 本別12-19

ガラス使用